

生徒にとって必然のある言語活動にするために —魯迅「故郷」の実践を通して—

岐阜県岐阜市立陽南中学校 布施 力

一 はじめに

来年度から実施される新学習指導要領では、言語活動例が示されるようになった。これは言語活動の充実を図ろうとするが故のものであると考えられるが、その考え方に従って生徒にとって魅力的な言語活動の開発を試みた。「魅力的」というと漠然とした感じがするが、生徒にとって必然があり、自分が身に付けた力を実感できるようなものであれば、言語活動は充実したものになるのではないかと考えている。

二 単元の概要

- (一) 単元名 「本の魅力を伝えよう」
- (二) 単元の目標
 - ・ 作品の内容や登場人物の生き方、表現の仕方について自分の考えをもち、相手を説得するために意見を述べることができる。

(話すこと・聞くこと)

- ・ 作品の展開や内容が場面や登場人物の設定に深く関わっていることをとらえ、文章の内容を的確に理解することができる。

(読むこと)

(三) 言語活動

- ・ 「故郷」を読んでつかんだ作品の魅力を相手に理解させ、納得させる。

(四) 単元について

- ① 本単元は、中学校第三学年「読むこと」の言語活動例「物語や小説などを読んで批評すること」を受けて設定したものである。具体的には、教材として魯迅の「故郷」を扱い、この作品の魅力を相手に理解させ、納得させるといふものである。そのため、次の二点について工夫を凝らした。
- ② 作品を読んで感動を受けた部分から読み進め、そこで多くの人が感動するメカニズムを紐解いていく。

- ③ 教科書に掲載されている竹内好氏の翻訳文だけでなく別の翻訳文と比較させることで

作品を客観的、分析的に読み進める。

三 授業の実際

第一次 単元の見通しをもたせる

本単元で行う言語活動が生徒にとって必然となるように、「故郷」という作品が全ての教科書に掲載されていることや日本だけでなく中国でも長く読み親しまれていることを伝えた。そして、「こんなにも長く人々に読み続けられているのはなぜだろう」と投げかけ、「それだけの魅力があるからだろう」という意識に立たせた。

第二次 作品の魅力をつかむ

生徒たちは「この作品の魅力をつかめば、課題が解決できそうだ」という見通しをもっていることから、多くの人が心を動かされる場面から読み進めていった。

① 第二時

生徒たちに「この作品で一番心が動かされたのはどこか」と尋ねると、口を揃えて「だ

んな様！…。」と言ったところだと答えた。そこで、「なぜ、この場面で多くの人が心を動かされるのか」という課題を提示し、意見交流を行った。その結果、「幼小の頃はあんなに仲がよかったのに、その関係が一気に崩れ去ってしまったから」という結論に至った。

② 第三時

主人公とレントウの幼小の頃に目が向いたので、「少年時代の主人公はレントウに対してどのような想いをもっていたか」という課題を提示し、意見交流を行った。その結果、「神秘の宝庫」と象徴されているように、憧れの存在であったことをつかんだ。

③ 第四時

ここで、実際の歴史的な背景を考えると、そんなことはありえないことであることを確認し、当時の中国の階級社会を忠実に描いた井上紅梅氏の翻訳文を提示した。竹内氏の翻訳文との大きな違いは次の点である。

主人公の呼称	竹内氏 「お前」	井上氏 「あなた」
自分の呼称	「おいら」	「わたし」
特徴	雇われ人の子であることは書かれておらず、対等以上で描かれている。	当時の中国の階級社会を忠実に描いており、敬語を使っている。

竹内氏の翻訳文と井上氏の翻訳文との違いを確認した後、「竹内氏の描き方にはどのよ

うな効果があるか」という課題を提示し、意見交流を行った。その結果「竹内氏のようにすることでレントウとの身分の差がないように感じられることや、このように表現することで二人が打ち解け合い、互いに惹かれ合ったことが強調されることを掴み、竹内氏の表現の仕方について批評をすることができた。

④ 第五時

レントウとの決別により、生徒たちは主人公の気持ちは沈んでしまったと感じていたが、それでは作品の解釈とは大きく異なってしまうため、故郷を離れる時の主人公の心情について考える時間を設定した。これにより、困難があっても新しい生活を手に入れるために希望をもって生きていこうとする前向きな主人公の心情をとらえることができた。また、前時の学習を生かし、レントウやヤンおばさんの生き方と照らし合わせながら表現することの効果についても言及することができた。

第三次 「故郷」の魅力について話し合う

多くの人が心を動かされる理由を探り、本文の内容を理解した生徒たちが、本単元の核となる「故郷」の魅力について話し合うのがこの第三次である。さらに、ここでは竹内氏の翻訳文の効果を中心としながら話の展開や細かな表現の仕方についても言及していくことで、これまでに身に付けた読みの力につい

ても自覚させることをねらいとしている。そのため、二年生で学んだ「異なる立場や考えを想定して自分の考えをまとめ、話の中心的な部分と付加的な部分などに注意し、論理的な構成や展開を考えて話すこと（第二学年話すこと・聞くことイ）を活用させ、根拠を明確にして「故郷」の魅力について話し合わせた。また、一方的な話で終わるのではなく、自分の話を相手に理解させ、納得させるよう促した。以下は、ある生徒の発言である。

私が考える「故郷」の魅力は、伏線を効果的に入れていることだと思います。なぜなら、幼い頃の主人公とレントウを描くことで「どんな様！…。」と言った時のギャップが大きくなるし、最後の砂地から月を見る目線の動きも、前に逆の目線の動きを入れることで重苦しい場面への展開や前向きさを表しているからです。

四 おわりに

生徒が必然を感じ、自分が身に付けた力を実感できるような言語活動を開発するという目的で実践してきたが、今後もさらに生徒にとって魅力のある言語活動を仕組み、確かな国語の力を育んでいきたいと考えている。

ふせ ちから 岐阜市立陽南中学校教諭。日本国語教育学会会委員。